國學院大學學術情報リポジトリ

講演録 平成26年度 教育開発シンポジウム
教養教育における「建学の精神」の可能性-私立大学
ならではの教育の実践-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: [國學院大學教育開発推進機構] メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002090

平成26年度教育開発シンポジウム
教養教育における「建学の精神」の可能性
—私立大学ならではの教育の実践—

日 時：平成27年2月21日（土）13：00～17：00

会 場：國學院大學渋谷キャンパス・学術メディアセンター（AMC）1階・常磐松ホール

主 催：國學院大學教育開発推進機構

共 催：國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター

参加者：78名

第1部 基調講演

「建学の精神」と教育

松坂浩史氏（文部科学省広報室長（文部科学広報官））

第2部 シンポジウム

【報告者・パネリスト】

「関西学院における理念の継承のありかた」

田淵結氏（関西学院大学教育学部教授・関西学院宗教総主事）

「初年次教育における国語力養成の取り組み」

小嶋知善氏（大正大学表現学部長・教育開発推進センター長）

「國學院大學の3つの慮いと教養教育のあゆみ」

加藤季夫氏（國學院大學副学長・教育開発推進機構長・人間開発学部教授）

【コメンテーター】

寺崎昌男氏（立教学院本部調査役、東京大学名誉教授）

【司会】

柴崎和夫氏（國學院大學教務部長、人間開発学部教授）

※所属等は開催当時のもの

開会の挨拶

（司会） ただいまより、國學院大學教育開発推進機構教育開発シンポジウム「教養教育における「建学の精神」の可能性—私立大学ならではの教育の実践—」を開催いたします。開催に先立ちまして、本学学長赤井益久よりご挨拶を申し上げます。

■ 赤井益久（國學院大學学長）

皆さん、こんにちは。國學院大學学長の赤井でございます。本日は本学教育機構主催のシンポジウムに多数ご出席をいただき、誠にありがとうございます。皆さんがいらっしゃるこの國學院大學は、明治15年、1882年に設立されました皇典講究所を母体としており、それから本年度で133周年を迎えます。その後、大学令によって初めて私立大学が認められ、八つの大学が認められましたけれども、そのうちの一つでございます。

明治15年と申しますと、我々は明治維新から15年経ったと考えがちでございますけれども、実は、まだまだ江戸時代を引きずった時代と考えた方が良いのかも知れません。当時、欧米に追いつき追い越せということで、欧化の波に洗われていた時代でございます。そのような時代に、我々の先人が、本学の母体であります皇典講究所を設立した経緯は那邊にあったかと申しますと、恐らく、今言うところのグローバル化——激しいグローバル化とっていいかも知れませんが——そのときに、自らの拠って立つ基盤、日本人の拠りどころをより明らかにすべきであろうというふうを考えて、設立されたわけでございます。

初代総裁有栖川宮熈仁親王は、この時に「告諭」というものを宣言されました。それを、本学では、建学の精神と位置づけています。「凡ソ學問ノ道ハ本ヲ立ツルヨリ大ナルハ莫シ」と宣言されまして、二つの大きな柱を掲げてございます。一つが、「國體ヲ講明シテ以テ立國ノ基礎ヲ鞏クシ」と

いうことでございます。日本の、また日本の文化の特色、日本の国柄を明らかにするという。もう一つが、「徳性ヲ涵養シテ以テ人生ノ本分ヲ盡ス」ということでございます。すなわち徳を涵養して、人が持って生まれた本分、個性を輝かせることが、日本人としてのつとめであると。以上の二つが、「百世易フベカラザル典則ナリ」、つまり不変の規範である、とこのように宣言されているわけでございます。

133年前のできごとですから、それをそのまま、現在の学生たちに教え、理解させるということはなかなか難しゅうございます。大学における自己点検・自己評価という動きがはっきりと出て来てからも、本学といたしましても、建学の精神というものをどう位置づけるか、どう教育の中に還元して行くかということに腐心して参りました。

一つには、「日本人としての主体性を保持した寛容性と謙虚さ」、これを現代的な解釈として掲げました。それはなぜかと申しますと、たとえば本日御講演いただきます先生方は、皆様もお気づきのことかと思えますけれども、宗教系の大学が多うございます。本学もまた神道系の大学として、「神道精神」によって教育と研究を行うということを標榜して参りました。そこで、「神道精神」はいかにあるべきかということを考えましたときに、それがすなわち「日本人としての主体性を保持した寛容性と謙虚さ」としたわけでございます。

それから、今申し上げました日本文化の究明、日本の国柄を明らかにする。また、人生の本分を尽くすことにつきましては、本日、國學院大學の教育開発推進機構、加

藤機構長の方からお話がございますので、私はこれ以上申しませんが、そのようにして歴史の中から、大変古うございませうけれども、現代的な解釈により建学の精神を位置づけて行こうという努力を、これからも重ねて参ります。

本日は、御講演いただく文部科学省の松

坂先生をはじめ、各大学のご苦心、ご努力というものを報告いただけたと思いますので、それを皆様と共有して、より良い教育と研究に還元して行きたいと思います。本日はご参加ありがとうございました（拍手）。

(司会) ありがとうございます。続きまして、本シンポジウム主催の、國學院大學教育開発推進機構機構長より、ご挨拶、ならびに企画の趣旨を申し上げます。

■加藤季夫

(國學院大學教育開発推進機構長)

皆さん、こんにちは。年度末が近づいて、皆さん方も非常にお忙しいかと思っておりますけれども、たくさんの方に参加していただき御礼申し上げます。

本シンポジウムを主催しております教育開発推進機構という組織は、平成21年に、大学における教育力の向上を組織的に行うということと、もう一つ、建学の精神の具現化ということを目的として作られた組織です。この具現化ということに関連し、機構としては2年に1回、建学の精神を軸にしたシンポジウムを開催しており、本年度で3回目となります。恐らく、建学の精神を中心とするということでは、これが最後のシンポジウム、まとめということになるかと思っております。

本日は、文部科学省のほうから松坂先生

に基調講演を行っていただくということと、その後、関西学院の田淵先生、大正大学の小嶋先生にはパネリストをお願いしています。そして、何と言っても大学教育の大御所であります寺崎先生に、ご無理を申し上げて来ていただきました。皆さん方の中には、寺崎ファンの方が結構いらっしゃるのではないかと思います。

本日は「教養教育における「建学の精神」の可能性」ということで、様々な論議をしていただきたいと考えております。本日のシンポジウムに参加した皆さんが、それぞれの大学において、今日の論議を踏まえて教育力のアップをしてくだされば、非常に嬉しく存じます。5時近くまで、長丁場になりますけれども、どうぞ活発な論議をお願いしたいと思います。本日は参加していただきまして、まことにありがとうございます（拍手）。

(司会) ありがとうございます。続きまして、本シンポジウムを共催しております、國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター長・阪本是丸教授より、ご挨拶を申し上げます。

■阪本是丸 (國學院大學研究開発推進機構校史・ 学術資産研究センター長)

阪本でございます。本日のシンポジウムの共催者ということで、ご挨拶を申し上げます。

冒頭に、赤井学長からのご挨拶の中でお話がありましたように、自己点検ということ、あるいは建学の精神といったものを活かして、大学の研究教育に資するものとし、かつ社会に還元して行くということですが、これも、平成3年の大学設置基準の大綱化のときに、様々なテーマがある中で、「教養教育」ということの色々な解釈がされました。中には、教養教育というのはもう必要でないんだという声も出ました。それが二十数年前のことで、私も本学における自己点検活動に最初に携わった者としてそこにおりましたのでよく覚えております。

その自己点検の中で、建学の精神をどのように現代的に解釈し直して学内及び学外に発信して行くか、ということテーマとして、先程も学長からお話がありましたように、明治15年の有栖川宮熾仁親王の「告諭」を現代風に解釈し、「日本人としての主体性を保持した寛容性と謙虚さ」として掲げたわけですが。そして、これを本学の研究教育にどのように活かすかということで、平成19年に、私が現在所属しております研究開発推進機構を立ち上げ、まずは、研究の面で、國學院の持っている建学の精神を体した研究ということを行い、続いて教育への還元ということで、その2年後の平成21年に、先程もお話がありましたよう

に「教育開発推進機構」の設立に至りました。

ということで、言ってみれば車の両輪というかたちで研究と教育を行う。その本体になるものは建学の精神であり、それを、研究教育を通して社会に還元すると。これを、平成10年の当時の大学審議会の答申にありますような、個性が輝く、建学の精神を元にして教育研究活動をして行って、社会に役立つ成果を生み出す大学として掲げたわけで、それ以来17年になります。

そういう意味で、先程、建学の精神をテーマとするシンポジウムは本年で最後だとありましたが、これはあくまでも、こういったシンポジウムを開くことが最後だということなのであって、少なくとも國學院大學においてはずっと考えてきたことであります。十数年間というもの、「建学の精神」を、研究ならびに教育でどのように応用展開して行くかということ——まず私ども研究開発推進機構としては、文科省のCOEあるいはORC事業という形で、また、その研究成果に基づき、これを教育に反映させるために教育開発推進機構が出来て、それなりの成果が現学長、あるいは前学長、前々学長のもとで、着々と進展して来ております。その意味で、私自身、校史・学術資産研究センターとして少しでもお役に立てたのかなと思って、感無量なのであります。

本日は、松坂広報官はじめ、大正大学・関西学院の先生方、そして寺崎先生とですね、それぞれ所謂ミッション系の大学というところがございますけれども、私個人としてもですね、大正大学には、ちょうど平成の初めの同大学の改組の時に、私も非常勤講師として、建学の精神といえますか、

そうしたモットーに関して、当時の学長さんと色々お話したことがあります。もう二十数年前のことになります。

それぞれの私立の大学で、建学の精神を元にして個性豊かな教育研究活動を推進し、社会に還元するという、あの当時の大学審議会の答申は——今から17年前になりますが——私としては、常にそこに原点として戻って考えながら、今回も最後のシンポジウムではありますが、本学の、またご

参加の皆様方にとって、そうしたことを踏まえた「私立大学ならではの建学の精神」を考える教育研究活動となり得ればと思っています。そのようなシンポジウムになれば幸いです。

何か、お説教じみたようなことになりましたが、私もこれで、センター長として最後のご挨拶になりますので、いささか感無量なことをございます。どうもご参会ありがとうございました（拍手）。